

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 荒原邦博

本論文『プルーストと世紀転換期の美術批評——横断線としてのテキスト・美術史・美術館——』は、フランスの作家、マルセル・プルーストの長編小説、『失われた時を求めて』とその周辺テキストにおける絵画の問題を、「横断線」という概念を軸として、歴史的な観点から考察したものである。全体は序章、第1章から第5章、および終章から成る。

筆者は、まず序章「絵画と横断線——プルーストと絵画の問題はどう論じられてきたか」において、思想家ジル・ドゥルーズがその著書『プルーストとシーニュ』で提唱した「横断性」という概念を援用しつつ、プルーストの作品における絵画の問題を、作品の外部との関係性において考察することの意義を確認する。その上で、このテーマをめぐる歴大な先行研究の歴史を詳細に記述したのち、作家のテキストを、他のテキストや個々の画家だけでなく、画廊や美術館という制度的な装置との関連も含めた多重的な観点から検証するものとして、みずからの研究を位置づける。

第1章「「ゲルマンの夕食会」における絵画の挿話の生成過程」では、『失われた時を求めて』の第三巻にあたる『ゲルマンのほう』の夕食会における絵画をめぐるエピソードがとりあげられ、いわゆる「生成研究」という方法により、プルーストが残した草稿から最終稿にいたる推敲過程が綿密に分析される。その結果、ギャラリーにおける話者による作品鑑賞のもつ美学的な重要性がはっきり増大していること、作中の画家エルスチールとの関連で引用される実在の画家や作品の数が増えていること、社交界の会話における引用の滑稽さがより強調されていることなど、テキストの生成過程においていくつかの主要な変化が起こっていることが立証されている。

第2章「マネをめぐる社交界の会話とその美学的問題」では、特にエドゥアール・マネをめぐる社交界の会話が分析対象とされる。『ゲルマンのほう』には、ゲルマン公爵夫人がマネの「オランピア」を前衛的作品として擁護する場面が出てくるが、筆者はこの発言がじつはエミール・ゾラの「絵画」という文章からの引用であることを明らかにした。そして、プルーストが芸術における革新性を、過去と断絶した独創性ではなく、独創性の中に伝統が間歇的によみがえることで保証されるものと考え、マネをめぐる会話を、絵画の自律性を肯定しながら、同時にそれを準備した言説に内在する前衛主義を批判するという二重の操作によって組織していると論じている。

第3章「19世紀後半におけるルーヴルの文学的表象と美術館の概念」では、ゾラの小説『居酒屋』とプルーストのテキストを通して、ルーヴル美術館の展示空間が分析される。筆者は1895年に書かれたプルーストの文章が、当時の三つの芸術雑誌における美術館をめぐる論争の白熱化を背景としていたことを明らかにした上で、それが地域主義的な発想

による歴史的な復元と、象徴主義的美学の要請による宗教的な建築環境の再現という、世紀転換期の二つの傾向のいずれにも反対する射程をもつものであったことを示した。そして、ルーヴル美術館が『失われた時を求めて』においては、世紀末的性格と第一次大戦後の特徴を兼ね備えた理想的空間として描かれていると論じている。

第4章「モローをめぐる社交界の「さかしま」な言説とその美学・科学・制度的問題」では、ゲルマント公爵夫人がギュスターヴ・モローの絵画について述べる言葉の中にユイスマンスの「ゴブラン」という文章が引用されていること、またオデットをサロメになぞらえる語彙が、同じ作家の小説『さかしま』に由来することが特定される。さらに、プルーストがモローの描く「詩人」の両性具有的な形象に雌雄同体という起源の回帰を見ていたことが指摘されるとともに、初の個人美術館であるモロー美術館がこの画家に特徴的な「鳥」のテーマを浮上させることに触れ、作家がこの美術館を、全体的空間の再現とは異なる芸術創造の場として重要な意味をもつと考えていたことを明らかにした。

第5章「ドガの美学・政治学的問題と世紀転換期の絵画「理論」」では、古代彫刻の「刺を抜く少年」から想を得たと推察されるドガの一連の絵画作品への参照が、プルースト独自のものが指摘される。筆者はまた、美術と国家の関係に関するアンケートへのプルーストの回答が、ローマ的規範の影響下にある美術制度から国家を分離しようとする質問者の意図に反して、むしろ芸術創造における伝統の拘束の必要性を主張するものであることを示した。さらに、小説の話者がカンブルメール夫人の進歩主義的なプッサン批判にたいして反論する箇所についてはモーリス・ドニの『理論集』が引用されている可能性を指摘し、プルーストがドガを介して独自の美術史概念を築いていたと主張している。

最後に終章「世紀と横断線、あるいは不断の生成」において、筆者は本論文の内容を概略的に復唱しながら、序章で提示された「横断線」という概念をふたたび召喚し、さまざまな二項対立のいずれにも背を向けるというプルーストの批評的方法論を、たまたま二つの世紀を横断することになった彼の時代的位置づけとからめながら整理する。そして近年のデジタル・アーカイヴの登場にも言及しつつ、不断の生成を続けるさまざまな横断線に遭遇し、しかもそこにとどまることこそが、プルーストの小説を経験する唯一の方法であると結論づけている。

本論文のおもな成果としては、次の点が挙げられる。

- 1) プルーストと美術というテーマについてはすでに膨大な先行研究があるが、その蓄積を十分に踏まえた上で、草稿、周辺テキスト、美術批評等々の幅広い文献を参照しながら、作家のテキストを個々の画家のレベルだけでなく、美術館という文化装置を含めた「外部」との関係においてとらえ、世紀転換期という歴史的なパースペクティブの中で読み直したこと。
- 2) 生成研究をはじめとする手堅い実証研究と、新しい文学理論を踏まえた綿密なテキスト分析を連動させながら、文学研究を美術史研究に向けて開くという野心的な意図をも

って、両者を横断する新たな地域文化研究の展望を拓いたこと。

- 3) 『ゲルマンのほう』の社交界で交わされる会話の中に、ゾラの「絵画」、ユイスマンスの『さかしま』と「ゴブラン」、ドニの『理論集』など、従来指摘されてこなかったいくつかの引用源が見られることをはじめ明らかにしたこと。
- 4) これと並行して、モローの「詩人とセイレン」、ドガの一連のデッサンなど、『失われた時を求めて』の背景となっているいくつかの絵画的源泉を明らかにしたこと。

その一方で、審査の席上ではいくつかの問題点も指摘された。

- 1) 第1章の草稿研究が全体の構成から浮いていて、第2章以降の内容と有機的なつながりをもっていないように思われること。
- 2) 「横断線」というキーワードがかならずしも明確に定義されておらず、どうしてもこのタームを用いなければならなかった必然性がはっきりしないこと。
- 3) 結論がしばしば現代思想家への参照に寄りかかっており、論理的・必然的に導き出される結論になっていない箇所が見られること。
- 4) ラスキンをはじめとする美術批評史への目配りが十分でないこと。
- 5) 図版がカラーでなく、図版目録も付されていないという形式的欠陥が見られること。

しかしながら、これらの問題点はいずれも本論文の本質的な価値を損なうほどのものではなく、むしろ筆者に課せられた今後の課題としてとらえられるべきものである。

したがって、本審査委員会は本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。